球状上顎嚢胞の2例

笹倉 裕一・笹倉 真理・久米川一浩・新藤 潤一

Two cases of globulomaxillary cyst

Yuichi SASAKURA・Mari SASAKURA・Kazuhiro KUMEGAWA Junichi SHINDO

Abstract: This report presents two cases of globulomaxillary cyst at our hospital.

Case 1. This case was a 22 year old Japanese female who visited our hospital on February 18, 1982. She complained of unusual sensitivity in upper left side lateral incisor area. The upper left side lateral incisor with resin filling showed non-vital pulp, the upper left side canine was vital. Labial and palatal mucosa of their apical part showed no abnormal swelling nor redness, though the area was severely painful. The root distance between the upper left side lateral incisor and canine was expanded, as seen in radiograph. Using a local anesthesia, the cyst was surgically removed; part of the cyst wall contacted with the sinus mucosa. The cyst contained a light, yellow colored serous fluid.

Microscopic examination revealed cystic lining with stratified columnar and cuboidal epithelium with scattered squamous epithelium. The wall of the cyst was infiltrated with chronic inflammatory cells. Case 2. A 50 year old Japanese male visited our hospital on October, 16, 1975. He complained of labial gingival swelling of upper left side, central and lateral incisor apical part. The upper left side central, lateral incisor and canine were vital. The cyst was the tip of thumb size, recognized clearly under the upper left side central and lateral incisor apical part in radiograph. Using a local anesthesia, the cyst was surgically removed. The cyst contained yellow colored serous fluid. Microscopic examination revealed cystic lining with cuboidal epithelium. The loose connective tissue with few infiltrated cells was seen in subepithelial region. In addition to these two cases, we analyzed 62 cases in the existing Japanese literatures (1939-1983).

Key word: globulomaxillary cyst

緒 言

球状上顎嚢胞は上顎に生じる嚢胞の0.6%を占める¹⁾比較的多い疾患である。本嚢胞は胎生期における球状突起と上顎突起の癒合部に残存した上皮より生ずる顔裂性嚢胞と考えられてきた。しかしこの癒合部が実際の嚢胞発生部位と一致しないことから、種々の議論がもたれ

ている。現在のところ過剰歯胚に由来する歯原性嚢胞説が有力のようであるが、歯原性嚢胞では割り切れない条件も内蔵されている。今回われわれは本症と考えられる2症例を経験したので報告する。

症 例

症例1: 22歳 女性

初 診: 昭和57年2月■日。

主 訴: 12違和感。

現病歴: 昭和57年2月、9年前にレジン充填した12に違和感を覚え開業歯科に受診。同部のデジタルX線撮影にて根尖部透過像を指摘され来院した。

家族歴・既往歴: 特記すべき事項なし。

神奈川歯科大学口腔外科学教室

(主任: 新藤潤一教授)

Department of Oral and Maxillofacial Surgery,
Kanagawa Dental College (Chief: Prof. Junichi
Shindo)

受付日: 昭和60年9月24日

写真 1 初診時口腔内所見

写真 3 摘出物肉眼所見

写真 2 初診時デンタルX線写真所見

写真 4 摘出物断面肉眼所見

現 症：体格、栄養とも良好。顔貌正常、口腔内所見では、123 根尖部唇側歯肉に腫脹、発赤などはなかったが圧痛を認めた（写真1）。12はレジン充填に2次う蝕が認められ、電氣的歯髄反応陰性、13は健全歯で電氣的歯髄反応陽性であった。X線所見では123 歯根離開があり、その間に境界明瞭な透過像が認められた（写真2）。

初診時診断：球状上顎嚢胞。

処置および経過：昭和57年2月■日局麻下にて嚢胞摘出、および歯根端切除術を行った。手術所見では、粘膜骨膜弁を剥離したところ123 部唇側歯槽骨は菲薄化し一部消失していた。嚢胞壁は比較的平坦で周囲骨との癒着はなく、上顎洞前壁の一部を吸収し上顎洞粘膜と接していたが剥離は容易であった。内容液は淡黄色、漿液性であった。

摘出物所見：嚢胞壁は一部に出血斑が認められる白色

を呈し、滑沢で、菲薄な部分と厚い部分が認められた（写真3, 4）。

病理組織学的所見：嚢胞は数層の円柱ないし立方上皮より成り、細胞間の空隙は広く、上皮下に細胞浸潤がみられた（写真5, 6）。

診 断：12は歯髄反応陰性であったが、嚢胞は根側に深く侵入し、炎症の既往もなく、組織学的に円柱ないし立方上皮におおわれているので、球状上顎嚢胞と診断した。

症 例 2：54歳 男性。

初 診：昭和50年10月■日。

主 訴：左側上顎前歯部歯肉の腫脹。

現病歴：4～5年前左側上顎前歯部歯肉に腫脹と疼痛を生じたが、自然に消褪。1か月前より再度腫脹し始めたので来院した。

現 症：112 歯肉唇移行部に弾性硬、軽い圧痛を伴う限局性腫脹があった。被覆粘膜は正常。112は健全歯、13はC₂であったが、いずれも電氣的歯髄反応陽性。X線所見では112 根尖部に拇指頭大の透過像を認めた（写真7）。

処置および経過：局麻下で粘膜骨膜弁を剥離したとこ

写真 5 病理組織所見 (H-E染色, ×160)

写真 7 初診時パノラミックスX線写真所見

写真 6 病理組織所見 (H-E 染色, ×320)

写真 8 病理組織所見 (H-E 染色, ×320)

ろ、膨隆部に直径7mmの骨吸収が認められた。嚢胞壁と切歯管とは骨によって隔てられていた。口蓋側歯槽骨も一部吸収されていたが、癒着はなく、容易に剝離、摘出し得た。内容液は黄色、漿液性だった。

病理組織学的所見：嚢胞壁は薄く、立方上皮で覆われており、上皮下は線維性組織のみで、細胞浸潤はほとんど認められなかった（写真8）。

診 断：嚢胞は12部根尖近くに存在していたが、いずれも生活歯で、組織学的にも立方上皮で覆われ、炎症性細胞浸潤もほとんどないので、球状上顎嚢胞と診断した。

考 察

球状上顎嚢胞は Klestadt²⁾ 以来顔裂性嚢胞といわれてきたが、近年その組織由来について種々の疑問が表明されている。まず Christ³⁾ は球状突起と上顎突起の癒合部が必ずしも上顎側切歯と犬歯の間に一致しないので、この嚢胞を顔裂性嚢胞の範疇から除外しなければならないと述べている。そこで今回1939年から1983年の45年間に本邦において報告された球状上顎嚢胞60例と自験例2例

表 1 年齢および性別

年齢	性別		計
	男	女	
10～19	6例	6例	12例
20～29	12	11	23
30～39	11	6	17
40～	6	3	9
不 明		1	1
計	35	26	62

について、主として唇顎口蓋裂⁴⁾と比較しながら考察した。本疾患における男女比は1.3:1とやや男性に多く、年齢は20歳代にもっとも多い（表1）。この点はあまり特徴的ではないが、左右別においては本嚢胞の発生率はほぼ1:1であるのに対し、唇顎口蓋裂では左側が右側の約2倍の発生率となっている。発生部位では本嚢胞は上顎側切歯と犬歯の間に70%近く発生しており、少数ではあるが上顎側切歯根尖部や、上顎中切歯と側切歯の間に存在したケースも報告されている。これに対し顎裂では上顎中切歯と側切歯の間に発生したものが約半数

表 2 発症部位における顎裂との比較

部 位	顎 裂 (大橋)	球状上顎 嚢 胞	嚢 胞 上 皮				歯 髓 反 応			
			円柱・立方	混 合	扁平	不 明	+	+-	-	不 明
1ⅴ23	100(50.3%)	5(8.1%)	0	3	1	1	4	1	0	0
1ⅴ3 2	—	5(8.1)	0	0	3	2	2	0	0	3
12ⅴ3	12(6.0)	42(67.6)	6	5	20	11	14	6	4	18
その他	87(43.7)	5(8.1)	0	0	2	3	0	0	0	5
不 明	—	5(8.1)	1	0	1	3	0	0	0	5
計	199(100)	62(100)	7	8	27	20	20	7	4	31

を占め、上顎側切歯と犬歯の間に発生したものはわずか6%にすぎない。ただし Archer⁶⁾のように球状上顎嚢胞が上顎中切歯一側切歯間、側切歯一犬歯間、犬歯一第1小臼歯間に発生する可能性があるとしている人もあるが、Thoma⁷⁾のように上顎側切歯と犬歯根の間に発生することを本嚢胞の診断基準としている人も多いので、側切歯一犬歯間以外に位置した嚢胞が球状上顎嚢胞の統計から除外されている可能性がある。いずれにしても唇顎裂の発生部位と本嚢胞の発生部位が一致しないことは事実であり、顔裂性嚢胞を否定する有力な根拠となる。そこで、本嚢胞の発生起原を別のところに求めるとすれば、歯原性嚢胞であろうと思われるが、まず、歯根嚢胞との鑑別についてみると、本嚢胞の発生部位と近接する歯牙の電気的歯髓診断の記載があった31例のうち20例(64.5%)が陽性であった。しかも電気的歯髓診断陰性のなかでもう蝕の認められなかったものもあり、これらの場合は本嚢胞の発育による根尖の圧迫などにより近接する歯髓の失活を招いたとも十分に考えられる。次に過剰歯の歯胚などこの嚢胞が一種の原始性嚢胞ではないかとの説で、Orban⁸⁾、Stafne⁹⁾などもこの説を唱えている。しかしこの部位は正中部と違って過剰歯の好発部位ではないし、嚢胞上皮の組織所見についてまとめみると、扁平上皮が27例(43.5%)を占めてはいるが、円柱・立方上皮が7例(11.3%)、円柱・立方上皮に扁平上皮が混在するものを加えると15例(24.2%)になる。一方、球状上顎嚢胞と報告されたもののなかに角化上皮は1例もなく、特に円柱ないし立方上皮を持った15例(24.2%)を原始性嚢胞とするのは難しい。北村¹⁰⁾は鼻口蓋管の遺残や上顎洞上皮の迷入などを考えているが、鼻口蓋管とは位置的にずれがあるし、上顎洞粘膜と接しているものは自験例を含め4例にすぎなかった。本嚢胞と顎裂の発生部位、嚢胞上皮と近接する歯髓の死活をまとめてみると、表2のようになり、本嚢胞の起原を球状突起と上顎突起の癒合時の遺残上皮に求めることも、歯原性と断定することも困難と思われる。しかしながらこの部位に特定の条件を備えた嚢胞が存在することは事実

なので、現在のところ Little¹¹⁾らのように本嚢胞を歯原性とも非歯原性とも断定せず lateral developmental cyst of maxilla の名称を用いるのが妥当であろうと思われる。

今回報告した2例のうち第1例は12が電気的歯髓反応陰性であったが、123部洋梨状X線透過像、同歯牙の根離開を認めた。第2例においては、嚢胞は12根尖部に存在したが1223は電気的歯髓反応陽性であり、切歯管とは歯槽骨により境されていた。病理組織学的にはどちらも立方上皮を持っていたので、球状上顎嚢胞と診断した。

以上考察したように、われわれも本嚢胞が球状突起と上顎突起の癒合部から発生するという説に疑問を表明するものであるが、本嚢胞がいまだ歯原性とも非歯原性とも確定し得ないうちに、原始性嚢胞や、鼻口蓋管嚢胞の中に包含されてしまうのは、将来統計的考察をする上で非常に危険なことと考えて、従来の球状上顎嚢胞という名称を用いることにした。

結 語

22歳女性の左側側切歯、犬歯根間部、ならびに54歳男性の左側中、側切歯根尖部歯槽骨中に発生した球状上顎嚢胞の2例を経験したので本邦報告例(1939~1983)60例と合わせ嚢胞上皮由来について若干の考察を加え報告した。

本論文の要旨は第129回口腔外科学会関東地方会に発表した。

引 用 文 献

- 1) Hertz, J.: Globulomaxillary cyst invading the maxillary sinus. Report of two cases. OS OM OP 16: 392-396 1963.
- 2) 石川梧朗: 口腔病理学Ⅱ. 改訂版, 永末書店,

- 東京, 1982, 386-414頁より引用.
- 3) Chirst, T.F.: The globulomaxillary cyst. An embryologic misconception. *Oral Surg* 30: 515-526 1970.
 - 4) 大橋 靖: 唇・顎・口蓋裂患者の歯数ならびに萌出の異常と顎破裂の部位に関する臨床統計的研究. *口科誌* 13: 401-422 1964.
 - 5) 中村平蔵監修: 最新口腔外科学. 第2版. 医歯薬出版, 東京, 1975, 755-763頁.
 - 6) Archer, W.H.: *Oral and Maxillofacial Surgery*. 1 Ed 5, Saunders Co, Philadelphia, 1975, p 522.
 - 7) Thoma, K.H.: Facial cleft or fissural cysts. *Int J Orthod & Oral Surg* 23: 83-89 1937.
 - 8) Orban: *Orban's Oral Histology and Embryology*. 9th Ed, Mosby Co, St Louis, 1980, p 22.
 - 9) Stafne, E.C. and Gibilisco, J.A.: *Oral Roentgenographic Diagnosis*. 4 Ed, Saunders Co, Philadelphia, 1975, p 164.
 - 10) 北村博則: 顔裂性顎嚢胞の発生学. 球状上顎嚢胞の歯系起原の可能性. *神奈川歯学* 11: 1-21 1976.
 - 11) Little, J.W. and Jakobsen, J.: Origin of the globulomaxillary cyst. *J Oral Surg* 31: 188-195 1973.
 - 12) 榎本昭二, 岩佐俊明, 他: 原始性嚢胞 (primordial cyst) の臨床的研究. *日口外誌* 23: 121-128 1977.
 - 13) 高木圭二郎: 顔面破裂嚢腫の一型たる球状上顎嚢胞と信ずべき稀有な一例. *大日本歯誌* 36: 377-385 1939.
 - 14) 平田 進, 松森正義: 最初に臨床上歯根嚢腫と思われ手術後に非歯性球状上顎嚢腫なりと確められたる稀有な一例. *慶応歯科医学* 1: 227 1941.
 - 15) 正木 正: 歯性顎嚢胞と誤られ易い非歯性顎嚢胞に関する研究補遺 (特に非歯性顎嚢胞の組織像と其発生機転に就て). *大日本歯誌* 37: 259-298 1941.
 - 16) 前川重和, 藤原忠行: 巨大なる球状上顎嚢腫の稀有な一例. *大日本歯誌* 38: 293-304 1941.
 - 17) 石田孝雄: 左右両側に対称性に発現した球状上顎嚢胞に就て. *歯科学報* 48: 252-259 1942.
 - 18) 明楽和雄, 北村実雄: 球状上顎嚢胞の1例. *歯科学報*, 51: 205-209 1951.
 - 19) 高橋謙一, 太田喜一郎: 球状上顎嚢胞の1例. *口科誌* 1: 299-302 1952.
 - 20) 大木茂雄, 新藤勝己: 対称性に発生した球状上顎嚢胞と考えられる一症例について. *歯学* 42: 57-62 1954.
 - 21) 鈴木義政, 鈴木義三郎, 他: 臨床上稀にみる球状上顎嚢胞の一例. *歯科学報* 55: 115-118 1955.
 - 22) 新井俊二, 辻 正, 他: 球状上顎嚢胞の1例 (抄). *北海道歯科医師会誌* 12: 20 1956.
 - 23) 渡辺桂吉, 平山弘太郎: 上顎の非歯系嚢胞腫の3症例. *耳喉* 30: 1065-1068 1958.
 - 24) 高 達, 加藤倉三, 他: 上顎前歯部における球状上顎嚢胞と考える1例について (抄). *歯科学報* 59: 251-252 1959.
 - 25) 牛山恒夫, 永沼慎夫, 他: 上顎球状嚢胞の1例 (抄). *歯科月報* 32: 13 1961.
 - 26) 生原醇治: 球状上顎嚢胞と思われる1例 (抄). *北海道歯科医師会誌* 17: 50-52 1964.
 - 27) 中山栄雄, 和田信宏, 他: 興味あるレ線像を示した上顎嚢胞の1例 (抄). *口科誌* 26: 173-174 1976.
 - 28) 浜田義彦: 球状上顎嚢胞と思われる1例について. *日本歯科評論* 291: 101-102 1967.
 - 29) 北山誠二, 広瀬恒久, 他: 球状上顎嚢胞の1例. *愛院大歯誌* 5: 250-253 1967.
 - 30) 久保隆一: わが教室における上顎嚢胞の統計的研究 (抄). *耳鼻と臨床* 14: 95-100 1968.
 - 31) 上村良彦: 球状上顎嚢胞の一例 (抄). *日耳鼻* 70: 2158 1967.
 - 32) 柏原利子, 郡司伊勢夫: 球状上顎嚢胞の一症例 (抄). *日耳鼻* 74: 1516 1971.
 - 33) 谷口幸治, 土井 尚, 他: 球状上顎嚢胞の1例. *口科誌* 20: 856-859 1971.
 - 34) 柴田寛一: 顎骨内に発生した先天性嚢胞の症例 (抄). *日耳鼻* 75: 1347-1348 1972.
 - 35) 馬渡和夫: 球状上顎嚢胞の1症例 (抄). *日口外誌* 19: 105 1973.
 - 36) 三上弘之, 鈴木 貢: 球状上顎嚢胞の病態一特に, その臨床所見と内容液の性状について一 (抄). *日口外誌* 21: 665-666 1975.
 - 37) 水谷英守, 小畑研一, 他: 顔裂性嚢胞の2例 (抄). *日口外誌* 22: 138 1976.
 - 38) 渋谷孝順, 長崎昭男, 他: 両側性に発生した球状上顎嚢胞の1例 (抄). *日口外誌* 22: 164 1976.
 - 39) 山本悦秀, 佐藤健夫, 他: 鼻腔領域に進展した球状上顎嚢胞の2例. *口病誌* 43: 173-178 1976.
 - 40) 石田 恵, 江口和子, 他: 顔裂性嚢胞64例の臨床統計的観察 (抄). *日口外誌* 24: 70 1978.
 - 41) 関 保仁, 滝川富男, 他: 球状上顎嚢胞の2例 (抄). *日口外誌* 24: 70-71 1978.
 - 42) 金田多恵子, 福田仁一, 他: 球状上顎嚢胞の1症例. *日口外誌* 25: 146-151 1979.
 - 43) 宮竹 昭, 末広 実, 他: Globulomaxillary cyst と思われる巨大な上顎嚢胞の1症例 (抄). *日耳鼻* 81: 414 1978.
 - 44) 吉田憲治, 向井則介, 他: 上顎両側に発生した2つの大きな嚢胞に対する1手術法 (抄). *歯学* 66: 405-406 1978.
 - 45) 坂本伸雄, 海野徳二, 他: Globulomaxillary cyst の2症例 (抄). *日耳鼻* 81: 1486 1978.
 - 46) 増田 屯, 町野 守, 他: 顔裂性嚢胞の2例.

- 城歯大紀要 8: 121-127 1979.
- 47) 石川弘司, 宇賀恵子, 他: 球状上顎嚢胞と思われる 1 症例 (抄), 歯学 67: 222-223 1979.
- 48) 高松英世, 前田健一郎, 他: 球状上顎嚢胞の 1 例 (抄), 日口外誌 26: 247-248 1980.
- 49) 溝越 孝, 伊藤輝夫, 他: 球状上顎嚢胞の 1 例 (抄), 日口外誌 26: 512 1980.
- 50) 後藤雅文: 球状上顎嚢胞と疑わしめた一例 (抄), 防衛衛生 27: 238-239 1980.
- 51) 三股保夫, 中島 亮: 球状上顎嚢胞の一例 (抄), 福歯大誌 9: 821 1983.